

第13章 考察

農事「サクイレ」と降灰による川原湯勝沼遺跡の畝断面解釈

—天明三年浅間災害に関する地域史的研究②—

関 俊 明

(1) はじめに

川原湯勝沼遺跡は、天明三年(1783)8月5日(新暦)の浅間山噴火に伴い発生した泥流堆積物におおわれた遺跡である。すでに、「天明三年浅間災害に関する地域史的研究⁽¹⁾」として、一連のハツ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の中で、天明三年の浅間泥流災害下で見つかる畑の畝断面の解釈について、考古学的な検証を試みた。それは、現行農事暦からみた夏の土用におこなわれる培土と、史料火山学の援用による7月27日～29日に降下の軽石をもとにしたクロスチェックであった。本稿ではさらに踏み込んで、史料に残された6月26日の降灰に着目することで、川原湯勝沼遺跡63区2号畑の畝断面の解釈を農事技法の間作と照らし合わせて検証しようとするものである。

天明三年浅間災害に関する研究論文は詳細に数多く存在していて、記述には新暦と旧暦が入り交じっている場合も多い。本稿でも史料による降下期日を扱うことになるが、農事暦を用いる際には現行の新暦との対照が必要となるため、原則的に新暦で統一して記述する。(引用史料中には括弧中に新暦を付記した。)

(2) サクイレ(間作)

1年の間に同一畑に多種類の作物を栽培することを多毛作という。このときに、異種の作物を同時に栽培管理する手法を一般に間作と呼ぶ。

まず、南九州で広くおこなわれてきた、麦—夏大豆—粟の三毛作の例についてみることにする⁽²⁾。第37表を参照して、農事を追いかけてみると、成育期間の関係から麦の刈り入れ前に、麦と麦の畝の間に夏大豆を播くことが必要となる。また、夏

大豆収穫前に粟を播くことも同様である。このように、宮崎県南西部では前作の畝間に後作を植え込む(播種)することを「引き込み」とか「中入れ」「イレサク」などと呼び、重要な農事の技法とされてきた。生産性を高めるためにおこなわれた工夫であるが、前作の刈り入れと後作播種において、互いの作物の存在により作業には手間仕事が増えることになる。それが故、この地方では「ナカヒキ」と呼ぶ間作に有効な農具が使われてきた。また、表中「豆中返し」とは、麦の切り株を鋤で掘って裏返す作業であり、この作業をしないといつまでも根が腐らず残って、粟が播けないという。

県内伊勢崎市⁽³⁾の例でも、「千駄のコヤシよりも一夜のマキシシ(播き旬)」といい、播種のタイミングが作物の出来に大きく影響を与えるといわれた。「サクイレ」に関しても、「エゴノキが花盛りだから、サクイレのシン(旬)」だとか、「エゴの花を踏んで蒔け」といわれたという。

当地、長野原の農事については、第38表を参照する。7月の麦刈りの前、畝には刈り取り前の麦がある状態で、サクに後作の粟・稗の播種をおこなう、または大豆の苗を移植するなどの場合がこれに匹敵する。つまり、麦のサクに発芽した粟・稗や大豆が生育している期間があり、生育する作物が同一畑内で重複することになる。このように、まだ前の作物が収穫される前に次の作物を播種あるいは移植して、栽培期間の調整を行う方法が間作であり、当地でも今日「サクイレ」と呼ぶ。

(3) 長野原町の関連農事

第38表は、地元古老の聞き取りによる、長野原地区における農事暦のうち本稿に関係する部分で

第37表 「えびの市の三毛作」『宮崎県史』を改編

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
麦												
大豆												
粟												

第38表 「長野原地区を中心とした地域の農事暦」を抜粋改編

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
麦												
粟・稗												
黍												
大豆												

ある。ここで注目しておくのは、粟・稗が麦の間作として播種されること、大豆が同時期に播種・移植されることである。

（4）「桑を洗て蚕二くれて」：地元史料の降灰分析
1783年噴火の降下火砕堆積物について、火山学の分野では、3ヶ月の噴火の推移（Aramaki,1956）や降下火砕堆積物の全体の分布（Minakami,1942）及び降下軽石を主体とした噴火活動全体の推移（Yasui他,1997）^{（4）}に着目するなどの研究が知られている。

これらをもとに地元史料を加え、火口から北～北東方向に位置する吾妻郡内の3ヶ月におよぶ一連の天明浅間山噴火の経過と降下物について、次のように集約した^{（1）}。

「5月8日ないし9日に降灰が始まり、6月26日の降灰を経ている。7月17日には北軸方向への降砂があったが、北東軸方向への降下の記録は残されていない。

い。7月27日に始まる29日までの噴火では、北軸方向と北東軸方向へも降砂をもたらした。そして、この29日までの降砂灰被害は作物に大きな被害を与え、訴状が書付けられるほどであった。他史料で、7月17日の北軸方向の佐渡、7月27日から29日の北東軸方向の東北地方での降下物の記録からも確認される。なお、30日以降の北東地域への降下物の具体的な記録については残されていない。」

天明三年浅間災害にかかわる史料は数々の性質をもったものに分類できる。なかでも、原著者が居住する地域周辺の内容を日付けを明確にしながら記録したものは噴火による降下物の記述についてかなり信頼性が高いと考えられる。この観点から、火口からみて吾妻郡内の北東軸方向の現中之条町東部で記述されたと考えられている片山豊滋氏蔵『天明三年七月 浅間大変記^{（5）（6）}』と原著者が当時の吾妻郡原町に居住と記録されている富沢久兵衛著『浅間記

(浅間山津波実記)⁷⁾について引用した。2つの史料は天明の噴火災害全般についての記述とともに、特に郡内への降下物を詳細に記述してある点が高く評価できると考えられる史料である。それぞれ6月26日の降灰を伴う噴火とその前後の部分とを、以下に引用した。これより、郡内への降灰が確認される。他の期日との間には「砂、小石」と「灰」の使い分けがなされており、この点から6月26日に降下したのは、軽石ではなく灰であったと判断される。

『天明三年七月 浅間山大変記』

四月八日(5/8)ニ雨降り 浅間山鳴候テ 下沢渡村ノみの原辺 原岩本村辺ハ青草ノ上ニ白ク灰降り

五月廿七日(6/26) 近村ニ灰ふり 桑を洗て蚕ニくれて…

六月廿七日(7/26) 同廿八日(7/27)之ころ 大岩辺 四万村杯ハ黒灰ふり 鉄砲玉のような砂ましりふり 野等人皆々通我家へ帰ル

七月朔日(7/29) 郡中一統砂降り 別而原岩本村杯ハ厚さ四分斗り降り其節ヨリ粟黍日追てかれ 木も…

『浅間記(浅間山津波実記)上』

先当四月九日(5/9) 焼候所拾里四方ニて雷電か地震かと思へハ浅間ニ焼立焼上ル それヨリ度々焼

五月廿七日(6/26) ニ諸国え灰降ル 其後も度々焼灰降り草木白ク成ル 馬ノ草洗テあたへ葉も洗テ蚕ニあたへ候得ども 毎日ふり候事なれば蚕半吉也

六月十八日(7/17) 浅間麓田代 大笹 大前鎌原え小石三寸程降ル 其後も度々焼灰降候事常陸国迄降ル

七月(朔日=7/29) 成り毎日、焼ル 信州 上州 相州 武州 越州 野州迄灰ニ 三寸ヨリ五六寸程ノ白毛降ル

(5) 川原湯勝沼遺跡の63区2号畑の畝断面

63区2号畑の畝断面図から、次の6点を読み取り、観察点としたい。①A軽石(本稿ではAs-Aのうち軽石と火山灰を区別し、それぞれ以下A軽石、A灰とする)がブロック状に堆積している部分が、泥流被災した直前の畑(サクイレに対しての後作)のサクと判断される。②おおよそ畝上にはA軽石の堆積はみられず、A軽石の堆積時は高低がより判然としていたものと考えられる。(多少の変形は、その後の泥流の厚密作用によるものとする。)③断面図にみる灰色のA灰層は厚さがいずれも1mm前後で、図中に途切れて3カ所確認される。④3カ所のA灰層のうち畝の直下にあるものは、前作のサクの形状を呈しており、残る両側のA灰層の厚さは同厚値を維持しながらも、不規則に乱れている。この土層の乱れは、麦の株痕を抜き取る耕作痕等によるものとの解釈で説明できる。⑤前述の乱れたA灰層とその周辺の土層は、目視により人為的なブロック層として分層はできない。⑥灰色のA灰は他遺跡で同様のものがみられる場合がある。(例えば久々戸遺跡などであるが、耕作痕を示す断面が得られる訳ではない。)

上記を集約して63区2号畑の畝断面の形状は、「厚さ1mmの灰色のA灰層が、泥流下畑の畝の下にはサクの形状を呈した面に堆積を示し、同じくサク付近の乱れて入るA灰層は畝の部分が削られ人為的に乱されたと判断される形状を呈している」となる。

(6) おわりに

現行農事暦と史料の期日より、図化された断面の解釈は、次のように集約される。

新暦6月26日に、広範な範囲にA灰の降灰があった。農事暦から考えると、麦の刈り取りを直前にした畑のサクに降灰が堆積し、残されたものと考えられる。(それは、「サクイレ」と呼ばれるこの地域という間作により、前作と後作の畝サクが入れ替わったことがその要因と考えられる。)その後、前作の麦刈りが終了し、サクイレされた後作の作物の生育

に伴い培土がおこなわれ、サク部分は畝に変わった。後作の作物が成育中に8月5日の天明泥流により被災した。(但し農事暦からみた場合、サクイレではなく、麦刈りに後に畑の起返しがおこなわれず畝が残された状態で、黍の播種・大豆の移植等がおこなわれた場合の可能性は残される。なお、黍は稗・粟に比べると栽培期間が短く、この地方ではサクイレはおこなわれなかったと聞く。)

その鍵となる農事暦等の期日は、後作の播種・移

植がおこなわれた6月、A灰降下の新暦6月26日、7月始に終了させる麦刈り、7月27日～29日にかけてのA軽石の降下、8月5日の泥流被災である。

軽石の降下日に加えて、降灰層を発掘調査における期日を限定する狭義の鍵層と位置づけることは、災害とこの地域で営まれた人々の生活を解明する一材料に追加することができると考える。今後共、発掘調査における観察の視点として、本稿がその蓄積の一端となれば幸いである。

注及び参考文献

- (1) 関 俊明・諸田康成「天明三年浅間災害に関する地域史的研究 ―北東地域に降下した浅間A軽石の降下日時 of 考古学的検証―」『研究紀要』16 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999
- (2) 『宮崎県史』資料編 民俗1 1993
- (3) 『伊勢崎市史』民俗編 1989
- (4) 安井真也・小屋口剛博・荒牧重雄「堆積物と古記録からみた浅間火山1783年のプリニー式噴火」『火山』第42巻 第4号 1997
- (5) 『中之条町誌』資料編 p.815 p.819-821 1983
- (6) (5)では『浅間大変記』という標題名であるが、萩原進は『浅間山天明噴火史料集成Ⅱ』p.157-177 1986で『天明浅間山焼見聞覚書』としている。また、同じく『浅間山天明噴火史料集成Ⅱ』のなかに同名の『浅間大変記』を括弧書きで用いた史料もある。現中之条町東部での泥流流下の様子が特に詳細に記録され、原著者がこの付近に居住していたことがわかる。詳細な記録が残されているということと、浅間山火口から北東軸方向にある現中之条町周辺の降砂灰についての信頼がおける史料であると思われる。
- (7) 萩原進『浅間山天明噴火史料集成Ⅱ』群馬県文化事業振興会p.121-153 1986